

年のはじめに

岩上 節子

様々な発見、発明。コンピュータを活用した実証的研究・開発に支えられた日々。物が豊富で便利な現代日本の生活。なのに、安心できない毎日。特に、子育て。

いつから、自分自身で『生きること』さえも、データで証明し、保証されなければ、安心できなくなってしまうのだろうか。

「子どもの生活は『遊び』が中心です。『遊び』

のなかにはいろいろな可能性が含まれています。私達大人は、その可能性に気付き、それがよりすばらしく、伸びやかに、そして、その人らしく育っていくことができるように援助を試みていくことが大切なのだと思われれます。」

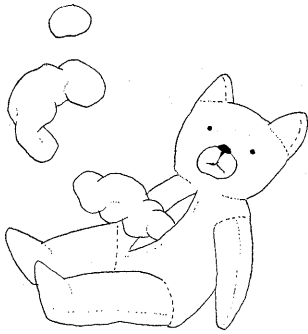
このことは、私が幼稚園という場で仕事をしていくなかで、先輩の先生方から学び、かつ、子ども達と生活してかかわっていくなかで、自分自身の手ごたえとして感じ、納得したことのひとつで

す。もちろん、一人一人個性の違う人達が相手です。その人の何に自分が気付いて、その気付いたことに担任としてどうかかわっていくかという決断を（たいていの場合、即座に）していかねばならないという現実、荷が重いものがあります。子ども達が帰った後に、「あれはしない方が良かった」とか、「した方が良かった」とか、反省ばかりが残ります。それでも、子どもとの生活のなかで『共に育っていく実感』は確かにあって、『遊び』に夢中になる子どもの自由を、できぬかぎり尊重する保育をしていくことに、今、迷いを感じません。『実感をもって生きられること』は、今、とても必要なことだと思うからです。

れる瞬間が増えていきました。「ちょっとずつ、自分なりにがんばっていきこう」という気になって、実際に、うれしい手ごたえを感じられることも増えてきます。自分自身が安定していられる時には、同じものを見ても、その良さに気付き、それを伸ばし得るようなかかわりがしやすくなるように思われました。でも、これはしょせん、幼稚園における先生と子どもの実感にすぎません。現代社会における親子の実感とはなり得ていない現実が目の前にあるのです。我が子を育てている親の立場としては、まだまだ安心できないのです。

「先生、私だって親ですから、子どもが楽しんで遊んでいれはうれし、子どもの思いもかけないような発想に自分自身が学ぶことも多いんです。でもね、今の日本の社会で、本当にそれだけで安心していいのかと思うと、いつも不安なんです。伸び伸びと遊ばせてあげたいと思う気持ちも本当なのに、塾やお稽古事に行かせている

と安心できる気持ちも本当なんです。子どもが友達と遊ぶ約束をするにしても、スケジュールの調整をしあわなくてはならなくて……。小さいのに大変だなあと思うんですよ。でも、今はじめないと手遅れになってしまうのではないか、と思うとやはりあせってしまうんです。だって先生、先生



のおっしゃることは、私だって大切だと思いますけれど、それで現代を生きぬいていけるといって確かな保証がありますか。そういうデータは、なかなかみつからないじゃありませんか。いいかげんなものかもしれないけれど、塾やお稽古事にはある程度のデータがあつて、ついすがつてしまうんですよね。これでいいのかな、とは思うんですけどね……」

親の本音に対して、私は私なりに思うことはあるけれど、それを伝えたからといって、親が安心できるとは思えません。何故なら、私が保育中に感じている手ごたえは、あくまで私の感覚的なもので、未来永劫不滅の真理ではないからです。毎日の生活のなかで子どもが変わってきたことであるとか、生き生きとした表情かおをするようになったことであるとか、確かにすばらしいことではあるけれど、それがその人の人生のなかでどんな役割を果たすかは、私には、証明できないのです。

「データはありますか」と問われれば、「ありませんけれど、大切な気がするんです」としか言えません。そして、言いながら、「我ながら説得力がないなあ」と感じ、不安な親の気持ちに変なところで共感してしまいます。伝わってほしいことはあるのに、上手く伝えられない。そんなもどかしさを抱えながら、また、日々は過ぎていきます。そんな時、私はある言葉に出会い、それが、私の心に強く響いたのです。

昨年のある八月のある日、私は、TVで放映していた映画「おもひでぼろぼろ」を見るともなしに見ていました。その映画は、主人公であるOL（東京在住）が、夏休みを利用して、親類の家へ農業を手伝いに来る所から始まります。そこで、脱サラして有機農業にとり組んでいる農村の若者と、田舎の美しさに感動している都会育ちの主人公が、次のようなやりとりをしていました。

トシオ「田舎の景色というのはね、自然そのものじゃない。人間が自然との共同作業で作り返したものだ」

タエ子「そうか、だからなつかしいんだ。生まれ育った土地でもないのに」

私は今まで、田舎風景を見て心がなごむのは、それが自然本来の姿だからだと無意識のうちに思っていました。でも、今は違うと思います。自然本来の姿は、時に『友』になり、時に『敵』になるものです。自然は自然のまま存在し、人に恵みをもたらしてくれることもあれば、人を傷つけることもあります。そしてまた人間も、自然から生まれたものでありながら、自然を生かしても殺しもするので。映画のなかで、主人公が田舎の景色を見てほっとするのは、おそらく、人間が自然のなかで、自然と折りあって自分達の居場所を作り、暮らしている姿に、同じ人間として、安心感

を覚えたからだと思うのです。「ああ、ここは、人も自然も、その本質^{ほんしつ}なりに存在^{そんざい}している場所なのだ」と。

本来、『生きること』というのは、自分と何かの共同作業をつみ重ねていくことのくり返しであつたように思われます。たとえば、私は、幼稚園という小さな社会で、私は私のままに、子どもは子どものままに存在していながらも、お互いの魅力に気付き、時に、時間や空間や気持ちを重ね合わせる事ができたとしたならば、きっと手ごたえを感じ、ほっと胸をなでおろすのだと思うのです。その実感を何で証明すればいいのか、どうやってデータを集めれば、皆が安心できるのかはわかりません。でも、やはり、試してみる価値はあるように思われるのです。

何かの折に、ほっとする自分の感覚を信じてみ

たい。

自分が、自分をありのまま受けいれるところから始めてみたい。

子どもが、この世の中に生まれてきただけでよかったと信じていられるように、ありのままの自分を出すところから始めてみたい。

そして、そこから作り出される何かを感じて、親にも安心してもらえたらいいな、と思います。何ができるかはわからないし、相変わらず保証もないのだけれど、今をつみ重ねていくことで、実感をもって生きていきたいと願う年の始め。どうぞ、今年もよろしくお願い申し上げます。

一九九五年正月

(幼稚園教諭)